

京都大学若手人材海外派遣事業 ジョン万プログラム（職員派遣）
平成 29 年度事務職員短期派遣プログラム報告書

研 修 者	職 名	掛員
	氏 名	吉松 優希
研 修 先 等	渡 航 先 国 名	タイ
	研 修 先 機 関 名	京都大学 ASEAN 拠点
	研 修 期 間	2017 年 10 月～2018 年 3 月
具体的な研 修内容	<p>1. 概要</p> <p>京都大学若手人材海外派遣事業ジョン万プログラムにより、平成 29 年 10 月から平成 30 年 3 月までの 6 ヶ月間、タイ・バンコクにある本学 ASEAN 拠点における業務に従事した。ジョン万プログラムで派遣された事務職員としては、通算 11 人目となる。ASEAN 拠点は 2014 年 6 月に設置され、本学の ASEAN 地域における研究・教育活動の支援、教職員・学生の国際化、広報・社会連携・ネットワーク形成支援のための活動を行っている。</p> <p>従事した主な業務内容は、総務関係（会議準備・資料作成、拠点スタッフの勤務管理、出張手続き、車両の手配、来客対応、HP や Facebook による情報発信、オフィス内物品管理など）、経理関係（仮払金の出入管理・報告、各種契約、立替払い、謝金支給手続きなど）、教務関係（留学説明会等でのブース対応、来訪やメール等による留学相談対応、部局の現地入試（テレビ面接等）実施支援、東南アジア地域の教育関係情報収集など）の業務に加え、東南アジアネットワークフォーラムの運営支援や各部局が開催するシンポジウム等の支援、その他、東南アジア地域で開催される行事への参加など各種イベント対応等も行った。</p> <p>2. ASEAN 拠点運營業務</p> <p>拠点の構成員は、拠点所長、URA（University Research Administrator）、ジョン万プログラムにより派遣される事務職員の日本人 3 名と、タイ人スタッフ 1 名の計 4 名。拠点所長はバンコクと京都を行き来していることもあり、スタッフ数が限られているため、オフィス内での事務的な仕事はジョン万職員が主となり、タイ人スタッフと協力しながら担当している。</p> <p>・仮払金の出入管理</p> <p>ASEAN 拠点では、大学本部から送金される仮払金を管理・執行し、領収書を添えて執行状況を大学本部に毎月報告している。オフィスの賃貸料や光熱費、インターネットや電話等の各種契約にかかる支払いから日々の消耗品の購入に至るまで、毎日のように仮払金による支払いが発生する。慎重を期さねばならない現金の管理には神経を使い、慣れない現地通貨の</p>	

扱いに最初は苦労することが多かった。また、現地企業等とのやりとりでは、日本と同じように対応して貰えないこともあり、支払いで問題が生じた際や、契約内容を変更する際など、現地の習慣やルールを理解しながら、大学規則に則って対応することの困難さを実感した。

・出張手続き

拠点スタッフがタイ国内や第三国へ出張する際の事務手続きは、ジョン万職員が担当している。出張予定が決まった段階で用務内容や旅程を大学本部へ報告すると同時に、航空券や空港送迎、宿泊先の手配等を行う。帰任後には、出張内容の詳細を適切に報告する必要がある。私自身は、半年間の滞在中にタイ国内出張が3件、第三国出張が2件あった。同時期に複数のイベント等が重なる場合は、拠点メンバーで手分けして別々の場所に出張することもある。自分自身が出張しない場合であっても、拠点メンバーの出張予定を把握し適切に手続きを行うために、関係者間での情報共有が重要となる。

・車両手配

拠点メンバーのオフィス外での用務や出張、また、本学関係者の来泰時には、移動車の手配が必要となる。ASEAN 拠点においては、現地レンタカー会社等に配車を依頼することが多くある。用務当日にスムーズな移動ができるよう、関係者との事前の連絡を密にし、スケジュール調整を行う。また、バンコクでは交通渋滞が多く発生し、場所や時間帯によっては移動に通常の何倍も時間を要することがあるため、現地の交通事情を踏まえたスケジュール管理が必要となる。

・会議資料作成（活動報告）

学内で月に一度開催される海外拠点等連絡会において、大学本部と欧州拠点、ASEAN 拠点の3か所をテレビ会議システムで繋いで会議が行われ、各拠点から1か月の活動内容の報告を行う。ジョン万職員が日々の業務内容や往訪・来訪の件数等を記録しておき、会議に合わせて活動報告資料のたたき台を作成し、URA や拠点所長の確認を経て、大学本部へ提出する。

・来客対応

タイには本学の協定校も多数あり、また、長年 ASEAN 地域をフィールドとして研究している教員も多い。そのため、個々の研究活動や、全学・各部局の国際イベント等のために本学関係者が来泰する機会が多くある。また、本学と同様にバンコクにオフィスを構える日本の大学・教育研究機

関関係者、本学の同窓生、タイ人研究者や学生、在タイの日本企業関係者等、半年間で延べ100名以上の来訪者があった。ジョン万職員の業務としては、はじめて拠点を訪れた方への拠点の活動紹介、学生への留学相談対応、現地入試（面接試験）の実施支援等を行った。学内でも普段関わることの少ない他部局の教職員や学生、学外の様々な機関の関係者と話をすることで、これまで見えていなかった本学の国際的な活動や幅広い交流の一端を新たに知ることができた。

・HP や Facebook による情報発信

ジョン万職員は、タイ人スタッフと協力して、ホームページと Facebook による広報関係の業務を担当している。ホームページでは主として ASEAN 地域で開催されるイベントの開催案内や、拠点からスタッフが参加した会議やイベントの参加報告等を掲載している。Facebook ではイベントの開催・参加報告のほか、研究助成や奨学金の公募情報、拠点への来訪者情報等を掲載し、より迅速かつタイムリーな情報発信を目指している。特に、日本への留学を希望する外国人学生向けの奨学金情報を Facebook に掲載した際には、普段の何倍ものアクセス数があり、ニーズの高さが伺えた。

3. イベント対応、出張等

(1) 留学説明会への参加

滞在期間中に、1. 在タイ日本国大使館主催地方留学説明会（タイ国内3か所）、2. 留学生スタディ京都ネットワーク主催 Kyoto Study Fair、3. キングモンクット工科大学トンプリ校主催 International Fair in KMUTT に参加し、京都大学の紹介および留学相談対応を行った。

1. 在タイ日本国大使館主催地方留学説明会

タイでは日本学生支援機構（JASSO）がバンコク及びチェンマイにおいて日本留学フェアを開催しているが、それ以外の地方都市においても、広く日本留学に関する情報提供を行うため、在タイ日本国大使館の主催で、タイの国立大学や元日本留学生会の協力を得て、毎年、コンケン、ピサヌローク、ソンクララー（ハジャイ）の3都市において、日本留学説明会を開催している。また、この説明会にあわせて、近隣の大学や高校、職業学校等を訪問し、留学に関する説明や教育事情について視察、意見交換を行っている。例年、大使館スタッフに同行する形で複数の日本の大学の教員、職員、現地スタッフが参加しており、ASEAN 拠点からはジョン万職員とタイ人スタッフの2名で参加した。訪問先の学校では、大使館と JASSO による日本留学に関するプレゼンテーションと並行して、タイ人スタッフ

による大学紹介、個別ブースでの留学相談対応を行った。また、各学校の教員との懇談や、学校施設や日本語授業の様子を視察した。訪問時には、学生がタイの伝統舞踊や楽器演奏、また、日本の音楽に合わせたダンスを披露してくれ、温かい歓迎を受けた。都市部での留学フェアと比べると参加学生数は少ないが、日本への留学に関心を持つ学生も多く、日本語授業を熱心に受ける様子なども見ることができて、タイの地方都市における教育現場について知る貴重な機会となった。

2. 留学生スタディ京都ネットワーク主催 Kyoto Study Fair

京都への留学生の誘致促進を目的として、留学生スタディ京都ネットワークが主催し、京都にある大学、日本語学校、専修学校等が参加してブース出展をしている。今回はバンコクのシェラトン・グランデ・スクンビットホテルを会場とし、同日同フロアで、JEDUCATION 主催の日本留学フェアも開催されていたこともあり、多くの学生やその保護者が訪れ、総来場者数は 746 名に上った。大学の参加は本学を含めて 3 校と少なかったが、本学のブースにも 150 名を超える訪問者があり、ASEAN 拠点から参加したスタッフ 3 名で対応した。学部進学希望の高校生やその保護者からは、日本語ができなくても留学可能なプログラムへの質問が多く、工学部国際コースや Kyoto iUP の紹介を行った。本学への来訪者は大学院進学希望者が特に多く、現在学部生で修士課程への入学を希望する学生が大半を占めた。文系・理系を問わず幅広い分野への留学希望があり、英語コースを希望する学生が多かった。

3. キングモンクット工科大学主催 International Fair in KMUTT

近年、タイ国内の各大学や高校が主催する留学フェアも増えている。本学がキングモンクット工科大学トンプリ校での International Fair へ参加するのは今回が初めてであり、今後の参加を検討するため、資料収集及びフェアの様子や各ブースの視察を行った。KMUTT の協定校や、大使館、JASSO 等、20 の機関がブース出展しており、うち、日本の大学は 3 大学であった。ASEAN 拠点が視察した午前中には、40~50 人程の学生が会場を訪れ、大使館や JASSO の奨学金情報や各大学の留学案内資料を収集していた。KMUTT の他にも、チュラロンコン大学やタイ国内の複数の高校等で、国内外から参加機関を募って留学フェアが開催されており、タイにおいても、早い段階から留学を視野に入れる学生が増えており、グローバル化への意識の高まりが感じられた。

(2) 東南アジアネットワークフォーラム等への参加

滞在期間中に下記のシンポジウム、フォーラムに参加した。

1. 東南アジアネットワークフォーラム@インドネシア (2017年11月)
2. 京都大学総合博物館主催 京都大学・ヤンゴン大学シンポジウム (2017年12月)
3. 東南アジアネットワークフォーラム@タイ (2018年2月)

東南アジアネットワークフォーラムは、元留学生が現地で作る同窓生組織と連携し、現地における社会的関心・ニーズの高い内容を学術テーマとして、本学の最新研究成果を還元するとともに、同窓生のネットワークの強化を目指して開催されている。

2017年11月には、インドネシア・ボゴール市にあるインドネシア科学院 (LIPI) において、同機関およびインドネシア在住の本学元留学生の同窓会組織であるインドネシア京都大学同窓会 (HAKU) と京都大学との共催で、第9回東南アジアネットワークフォーラムが開催され、ASEAN 拠点からはジョン万職員が参加した。当フォーラムは、国際社会における競争力強化のための高等教育機関および研究開発機関の貢献をテーマとした講演とセッションを中心にプログラムが構成され、稲葉理事・副学長による開会の挨拶に始まり、午前・午後のセッションを通して、複数の講演と質疑応答を含めた活発な意見交換が行われた。また、フォーラムの前日には、東南アジア地域研究研究所ジャカルタ連絡事務所において、インドネシア京都大学同窓会が開かれ、インドネシア人同窓生、日本人同窓生、本学関係者等合わせて約50名が参加し、和やかな雰囲気の中で、参加者同士の交流が深められた。

2018年2月には、タイ・バンコクにて、京都大学タイ人同窓会京都ユニオンクラブ (KUC)、モンクット王ラカバン工科大学、泰日工業大学と京都大学との共催による第10回東南アジアネットワークフォーラムが開催された。4回目のバンコク開催となった今回のフォーラムは、「Bioenergy Conversion Technologies and their Application: Moving towards Sustainability」をテーマに、延べ180名を超える参加があった。また、フォーラム後には、KUC、フィリピン同窓会との交流会が開催された。次年度開催予定のフォーラムや、同窓会の更なる充実等についても意見交換が行われ、今後益々の研究・教育交流の発展に期待が寄せられた。バンコクでの開催であったこともあり、ASEAN 拠点においても、タイ人同窓会や各関係機関と協力し、フォーラムの運営をサポートした。ジョン万職員は、フォーラムに係る会計処理手続きや日本からの参加者の交通、宿泊の手配、当日の運営補助等を行った。このような大きな国際関係のイベントに携わる機会を得られたことで、大学全体や各部局の国際交流の動向を知ることができた。また、多様な国から多くの研究者が集う国際交流の現場に立ち会うことで、

	<p>本学の同窓生同士の繋がりや深さとその重要性を実感した。</p> <p>また、イベント参加等に合わせた出張においては、本学の協定校や政府関係機関、研究・教育機関等を訪問する機会があった。本学がこれまでにASEAN 地域で築いてきたネットワークの広がりを感じた一方で、国際広報活動が活発な外国の大学や日本の他大学と比べると、本学の諸外国における認知度はまだそれほど高くなく、今後さらに交流の幅を広げていく上での課題を感じた。</p> <p>4. その他</p> <p>上記以外に、拠点スタッフの勤務管理や表敬物品等の管理、各種契約の更新、その他オフィス運営にかかる庶務はジョン万職員が担当している。着任当初は、拠点の業務内容や引き継いだ業務の進捗状況の把握に精一杯であったが、少しずつ日本で経験したことのない業務や職場環境等にも慣れ、自らが置かれた状況を楽しむことができるようになった。</p> <p>日常生活においても、慣れない海外生活に最初は不安を抱いていたが、バンコクの街は想像していたよりも都会的で、快適な生活を送ることができた。タイに来て暫くは、プミポン前国王の葬儀を控えた服喪期間中であったため、街行く人々は黒色の服に身を包み、市内の至る所に国王の大きな写真が飾られ、普段の活気に満ちた街並みとは少し異なる独特の雰囲気を感じられた。気候も、年度の後半に当たる時期は、最初こそスコールや高い気温、湿度に驚くことがあったが、次第に季節が雨季から乾季へと移り変わり、比較的過ごしやすい気候に恵まれた。休日には、タイ国内の寺院や市場等を巡るほか、家族や友人が来泰した際には、バンコク市内観光以外にも、近隣のリゾートに旅行に行くなど、海外生活を満喫し、言語や生活習慣、食事、宗教等、日本とタイの文化の違いを楽しみながら学ぶことができた。</p>
<p>本学の国際化に対する研修成果の活用方法・フィードバック</p>	<p>半年間の海外研修を経て得られた成果として、下記の3点を挙げたい。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 全学海外拠点という国際交流の現場での業務経験 2. 拠点運営に係る幅広い業務の経験 3. 新たな人との繋がり <p>ASEAN 拠点では、タイ人スタッフとのコミュニケーションには英語を使用している。拠点での日常的な事務手続きはジョン万職員が担当しているが、現地事情に精通しており、また、現地機関等とタイ語でやりとりが可能なタイ人スタッフの協力はなくてはならないものだった。タイ人スタッフとの英語でのコミュニケーションにおいては、最初は語学に自信がなく消極的になってしまうことがあったが、こちらの言いたいことや業務の内容をよく理解して、積極的に協力してくれる姿勢に日々助けられた。日本</p>

とは異なる現地のルールや習慣により手続きがスムーズに進まず苦労したことも多々あったが、タイ人スタッフや日本側の関係部署からのサポートにより、なんとか乗り越えることができた。そのようなタイ人スタッフとの日常的なコミュニケーション、外国人留学生や研究者との英文メールのやりとり、留学フェア等での英語による大学案内等を通じて、業務で英語を使うことに以前よりも抵抗がなくなった。また、日本で仕事をしているとあまり機会がないが、留学希望の学生や京大との学術交流を希望する研究者たちと顔を合わせて直接話をすると、その熱意や意欲を直に感じることができ、そのような人たちの希望を叶えて留学や研究交流が実現できるようサポートしたい、という気持ちがより強くなった。今後、そのような気持ちをモチベーションに、事務職員として学生や研究者に寄り添ったサポートをしていきたい。

また、半年間という短い期間ではあったが、ASEAN 拠点において総務、教務、経理等幅広い分野の業務を経験できたことで、様々な部署に所属する職員一人一人の業務が繋がりがあって、大学運営が成り立っているということに改めて実感することができた。さらに、学内関係者だけでなく、日本や東南アジアの国々を中心とした学外の研究者、学生、大学関係者等との関わり、また、全学と各部局それぞれの活動や取組みへ対応等を通じて、大学の国際化の現状や難しさを改めて認識することができた。京都大学は非常に規模の大きな大学であるため、業務の縦割り分担が多く、自分の担当以外の系統の仕事について知る機会は少ない。しかし、国際化を推進している今、どの部署やどの業務においても、直接的または間接的に海外と関わる機会は多くあり、事務職員として、自分は国際業務とは関係ないとは言ってはられない状況になっている。今後、どのような業務に携わることになっても、自分の行う業務がどのような人や物と関わり、大学のどのような活動に繋がっていくのか、常に広い視野を持ち、積極的に業務に関わる姿勢を持ち続けたい。そして、本学が掲げる「次世代を担うグローバル人材の育成と育成基盤の強化」、「国際的な研究環境・研究支援体制の整備」といった施策の実現に貢献していきたい。

さらに、バンコクに滞在した半年の間に、様々な人と関わり、新たな人的ネットワークを築くことができたことは、今後の自分にとってかけがえない財産となった。ASEAN 拠点のスタッフ、学内の関係部署の職員の方々、日本から出張に来られた部局の先生方など、初めて業務で関わることで学内関係者も多かった。また、タイに海外事務所を置く日本の大学による連携組織である在タイ大学連絡会（JUNThai）等の会議や、大使館、日本学術振興会、国際交流基金、他大学事務所等が主催するイベントに参加する機会も多くあり、学外の人と関わる機会にも恵まれた。様々な職種、立場の人々と関わることで大きな刺激を受け、それぞれの考え方

の違いや仕事の進め方の違いなどを目にして、大学の国際化という大きな目標に向かうためには、様々な立場から各々の関わり方、貢献の仕方があることを学んだ。また、近くに事務所を構える機関の職員の方々とは、一緒に食事をしたり、休日に観光に出かけたりするなど、仕事以外の場面でも交流の機会を持つことができ、仕事の合間にリラックスしたひと時を過ごすことができた。

帰国後は法学研究科の大学院教務掛に配属となり、入試や学生の履修・成績、奨学金等の教務関係業務を担当している。法学研究科には外国人留学生が多数在籍しているが、入試の際に高い日本語能力が求められるため、入学前の時点で日本語の読み書きができる学生が大半である。そのため、日常業務で英語を使用することや、海外とやり取りする機会は少ないが、研究分野によっては、日本語を話すことのできない学生もおり、また、海外からの英文の問合せメール等も近年増加している。そのような数の少ない事例にも丁寧に対応することで、学生や研究者へのサービス向上を目指し、大学の国際化に資する業務を行っていきたい。

半年間の研修の中では、上手いかないことや苦勞したこともあったが、何事も経験、という前向きな気持ちで乗り越えることができた。本研修に参加させていただけたことで、日本ではできない多様な経験ができたこと、バンコクで充実した毎日を過ごすことができたことに感謝し、この経験を今後の業務に活かしていきたい。